猫の尻尾も借りてきて
久米康之
朝日ソノラマ（文庫）
（6／30刊・¥390）

古典的な時間テーマのスタイルで書かれた作品だ。天才的な一科学者が発明したタイムマシン、時間の流れを変えようとする主人公――設定は、ホーガンの『未来からのホットライン』とよく似ている。ただ、わざと大時代的な設定で時間ものをこなしたという点を除けば、本書の場合、主人公の恋人が殺されたが、実は……の、ミステリ風犯人捜しに焦点が絞られていて、あまり共通する雰囲気はない（むしろ、ミステリ＋ヤングの「たんぽぽ娘」ですね）。残念ながら、本書は物語の導入部がやや緩慢で、研究所の描写も説得力に乏しかった。タイムパラドクスには、それなりの工夫がこらされていたのだから、もっとテンポを早め、スケールを大きくすべきだったかも知れない。

主人公の影が薄い。何が何でも恋人を救おうとする、主人公の意気が空転して見える。死んでしまった女の子の方が、かわいそうなくらいだ。その他、まだまだ生かしていけるキャラクターはあった。もったいない。

著者は宇宙塵の同人。ソノラマから次々とデビューする新人作家の一人。本書が処女長篇にあたる。

（俊）